

寛永諸家譜

清和源氏系七冊之目
支流

59

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186	(59)
函號	76	1



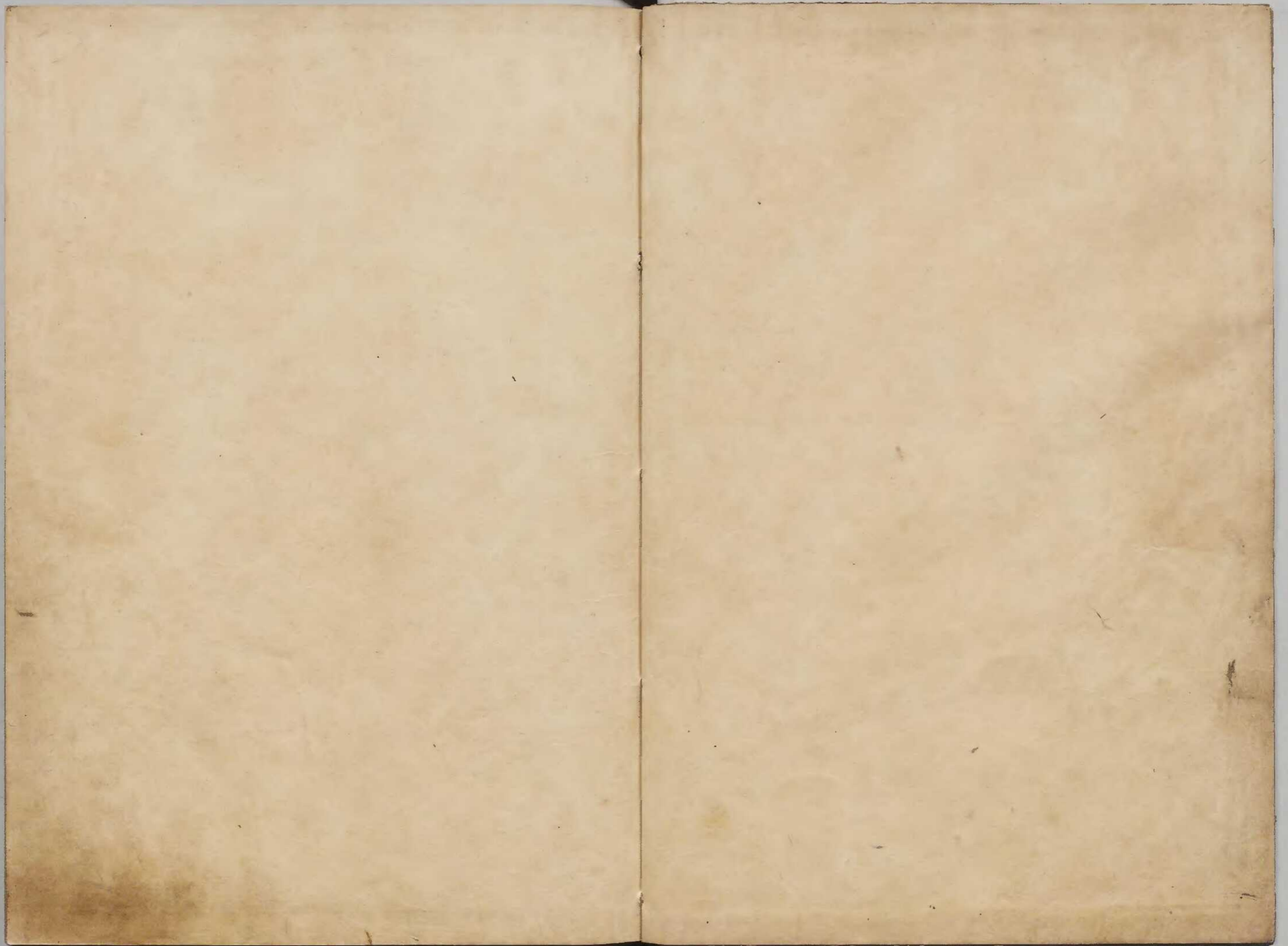
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





西尾	小坂
富士	伏屋
小長谷	妻田
矢頭	作脇
芝山	尾崎
尾園	

寛永諸家系圖傳

清和源氏

癸四

淺草文庫

支流
西尾

吉次

隱岐守 從五位下 生國尾列

初信長へは信長他書乃ときハ

泉列塔へ

東照大権現の御供ひくすにふると増ふる

三列へ供なりし其時分ふる 御為家

より流るる

慶長四年十月三日従五位下に叙し

同十一年八月二十六日年七十七少く

死す

忠永

主水依 従五位下 丹後守

實ハ酒井河内守重忠子なり若次養

子

長文長八年従五位下に叙し丹後守

任す

元和六年正月十四日年三十七卒

忠昭

右京亮 丹後守

寛永七年十二月二十九日従五位下

忠知ちか

一叙しよ

主水依しゆすい

生國なまくに武列ぶりよく

家紋いえもん柳やなぎ松まつ

西尾

吉次

小左衛門尉 従五位下 隠岐守 生國濃列
 大指現 一萬二千石 許
 慶長十一年八月二十六日 城列 伏見小
 松乃 病死 法名 梵長

利氏

藤兵衛尉

生國同前

實ハ露見市亞利政が子なり

本國濃列
彼露乃丸

信長小治不利政死一々乃ち西尾徳

政守小治一々乃ち露見とわく西尾

と号

大指現一信久なる下総國千原郡乃内

少々千石乃知川と下りる

慶長五年國原泚陣一信年一

陣以後養濃國原見郡乃内藪田村上

奈良村少々九百石乃泚加増とた下り

利氏が生不一家小治と下りる乃

上意と知ふ不知川村合千九百石也

同十六年七月十九日駿列一々病死

四十七歳 法名全勝

政氏

市兵衛尉 藤之丞尉 生國總列

慶長十五年七月武列江戶小おな

名徳院殿と評しなむ

同十六年父利氏後府小たわく病死

りしは後府人戸あり

大権現よりみえくまのり利氏が遺跡

千九百石乃内濃列九百石乃不在郷

小おなと嫡子政氏小下三郎又下總丞乃

内千石ハ二男後三郎り下三郎

元和二年より

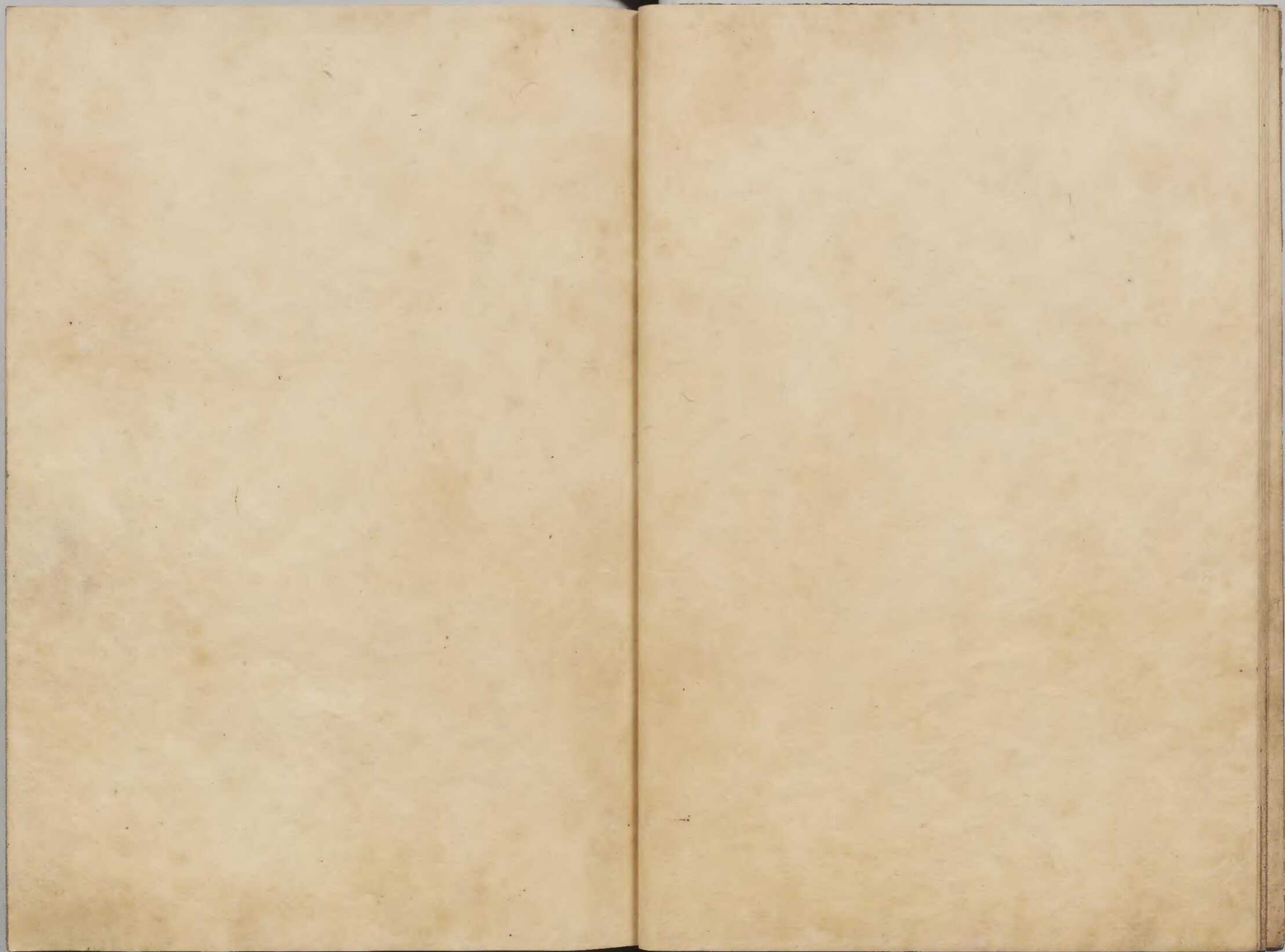
名徳院殿へりしは道主より

將軍家へは之くまのり

寛永十年常列乃内よおなく二百石

御加増より戸分都合千百石

家紋串松 又尾花



● 吉次

隱岐守

西尾

忠永

丹後守

系尾別入 是と出と

老定

因幡守

生國駿列

實ハ銘本三部大史の子なり外祖西尾隠

岐も老次が養子となりて忠長が二千石

乃領地のうち七百石ととりて老定小

さげく其後老定病ありふらけり事

あり守こ乃少一領地と返上りしけり

とと

名徳院殿是とありしひきまひて病中老

料物とく七百石とく領り實子ふふ小

しりし老長と養子とす

寛永五年八月下総ありて病死四十歳

法名傑峯

重長

小戸藩門尉

生國江列

名徳院殿

將軍家（佐々木）の御用儀に由り小性組乃由
費とす

家紋 柳 松

某

鈴木平兵衛門

生國遠列

某

三郎大史 生國同お

永禄十一年十二月

東照大権現遠列 御進致乃時三郎大史

と菅沼治郎右衛門を後石見とむかひく

軍功ありとこまじと外若三人と号す時小

大権現より御書とすりつるびく大

菅沼進致の系圖よりとす

長

半三郎 生國同前

元和元年十月江列こし中ちゆうくく病いひ死し五ご十じゅう歳さい

法名淨雄じやうゆう

吉定きちぢやう

西尾にしお周しゅう悽せい守しゅ

西尾にしご

● 光秀ひかりひで

兵庫頭ひょうごづかみ

生國次列なまくにしり

濃列のうり

曾根城そねのしろ

居い

光秀ひかりひで

男子おとこななささふふしししししし

信光のぶひかりと屋や

— 家督けとくとゆづゆづ

信光

出雲 住不同前 信光実八丹波國比叡人
叔升越後守藤原光長が子あり
光秀が孫なり

光教

豊後守

住不同前

秋後山城守小属也 亦小濠升長政

朝倉義景よりつとむせ八千余乃其ハ
そのとひきわけて氏家ト全ッ居城濠列
大垣乃城とおそんともそへ赤坂小
いふ時小ト全大垣乃を急ハ幡まが
出張と光教十八業なわといへど家
来小武勇乃かま建あるものおろこ建
あるゆへト全ト知リ信光教則先手
こゝろ又敵乃先陣稲葉経殿右衛門
攻地の案内者あり

とく光教鑑とてしるく燈殿右邊つと
くつひはぬ小共首とてしる又次小一騎
のさきしるころふ光教が中右邊門
もくじくきくつひの首と得るりこの
時敵勝利と得光教ふつとつふふ
そのまひきとる時り大將ト全ち
感状とてしるくそのち織田信長乃令
小つりト全が妹と娶致
信長濃列小出張乃とて光教いさこし

むぐた日られもくさあつとて終をえ
くまひくこまと感て遠山常毛とい馬
とつりられち殺度軍功とぬまんづ致
ゆ唐繪前子乃掛物とてしる光教後存
小おわくく死とるもさき言てて後ひゆ
とた多上野分をたつと

東照大権現

光教とてめ秀名小流とて時り

大権現

名徳院殿よりくつろげけさき、
乃火より、
許意ありとこ

与河取様伏見藤森光教が宅より入河

たまふ

大権現會津河陣乃時光教河原にきんと

河原より大坂よりいりきと承へり

と河原より大坂刑部女捕とく

出外よりきり平塚因幡と

我より河原より光教のきり東國より

おしりくつかつきといふ光教志く

お答よとあつた無と申す

小山乃河陣よりいり河原刑部女捕こ

まといりて光教が領地曾根乃を

やまこよりいり小光教が妻子大坂小あり

治部女捕こまといり

とあつりこまといり即ちともひり

妻子と京都小ありと

おより光教小ありと

妻子とあつて一たまたまこの山に小丸を
籠とすぬる石田治部久捕逆心し
か

大権現とぞに小山より江戸へかへりたまふ
時小光教先手乃諸將と清例小はれそ
評議ありてまげ夜阜乃城とせむべし
とくすまら福嶋右衛門左衛門とせむべし
光教の地乃案内者とるたふらで先陣
小むふ池田三右衛門八段龍寺口とせめ

福嶋と光教ハ萩原川とる川とせむべし
せむ
夜阜落城乃ち

大権現勝山より清陣とるへまふ也人教ハ
赤坂小陣と小野日向守とび小光教
与人 各命とつてふり清陣おしへた
り小曾根乃ちり出小とく垣乃本戸と
いふこころあつて日とては鉄炮と放ちいふこ
ろ

九月十日石田三成大垣とくろ國原へ
出陣とくろのあつ六福原右馬助をくろ
留ませしむこまに流わす 約命あつて水
野日向守と光教とのか乃城小むふ翌日
十日右乃助大垣とくろ日守と
光教と波城へせめせしむ河口とま破る
とよ敵乃流ハとの城中へおげ入しと逃
けあましうらとくろと高橋右近秋月長門
守相良右兵衛三乃九下りこまの火籠と

こまの味方小戸いんこまの城こまいん

与人

大指現小しなるそ我命とををけで降人
とるり三乃九とくろがきな九りいり人
質とくろあつて志くこまハ一戦とけ
死せんといふとふら與人こまとゆると
光教をくろ戦功あること

大指現感どおげしりしり一石乃加増と
くろのこまく三乃石と願ど又後府小

おわく鷹野乃地と下さ家

大坂沙陣乃時光教嘉教松平下総と小

くう道明寺急小おわく即従と首

級と侍とと

光教男子二進る事小よりて外孫三人小

家督とゆふ

元和二年霜月十九日卒と七十三歳

散次

信濃守

慶長十三年五月六日死と二十一歳

嘉教

出雲守 家督と侍いで二万五千石と知

行と男子ふ事小よりて断絶と

元和九年四月二日死と三十四歳

氏教

寛永十一年 十五歳乃と尋ふるに院人なり

江戸小こ進ありて光教知行乃らち五千石

と願知と

大坂陣の時山伯蒼とふくく軍事

と法と心

寛永十年六月十七日死と四十二歳

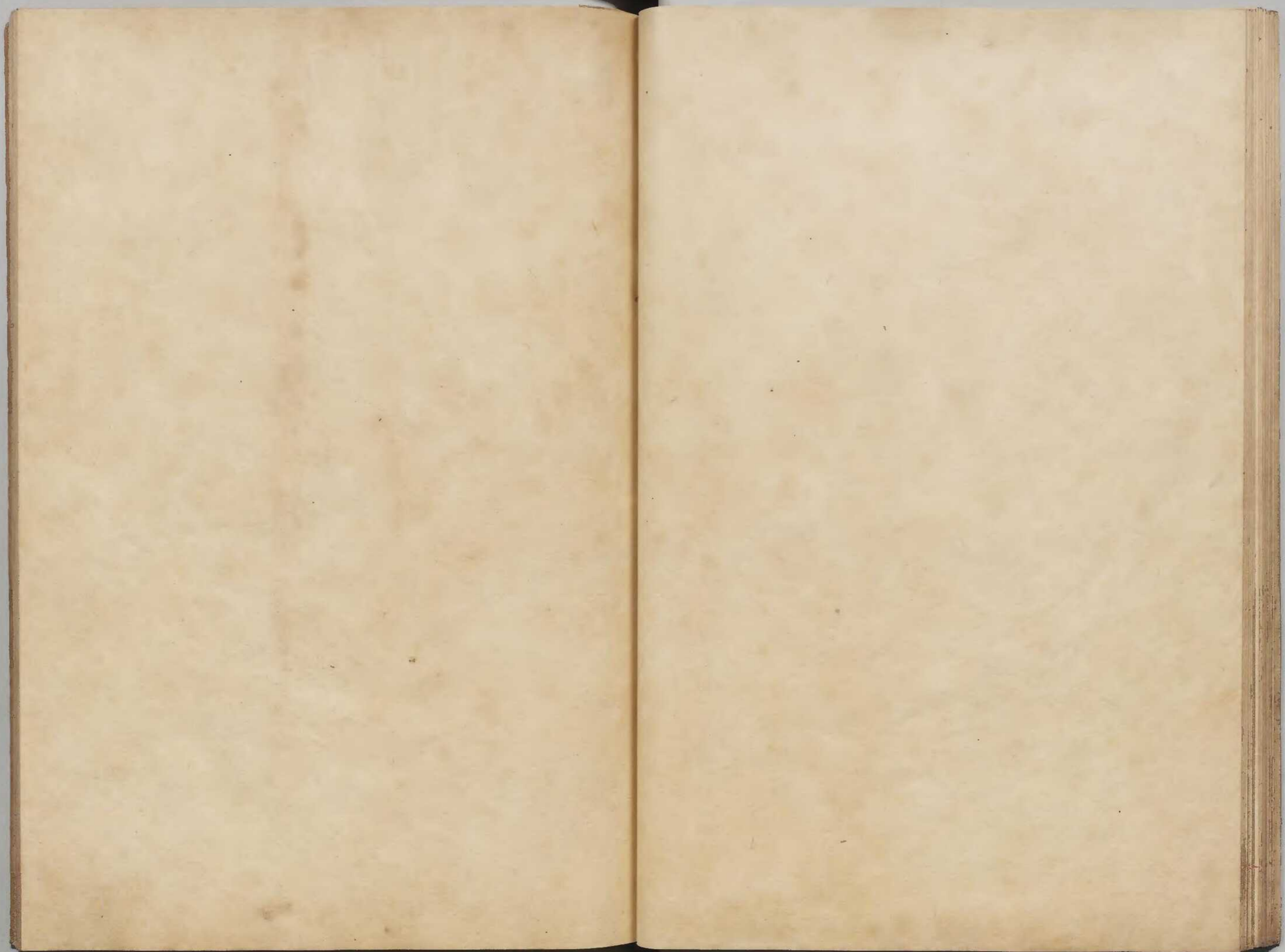
盛教

権助 母八織田三喜女 元和七年小生

知り乃負教りよのごとく 氏教死去のち

治月 作付

家政 松系



小坂とさか

● 改表かへて

喜九郎きくろ

生國尾列なまくにお

織田信長おだのぶなが 守り属まもりぞく 一いち 主後信長しゅごのぶなが 小坂とさか

天正三年十月七日てんしゅう三年十月七日 尾列お 中ちゆう 病死びやうし 法名ほふな

淨順じゆんじゆん

雄吉

孫九郎

生國同前

織田信雄

尾列乃ららるるがこいふ人信雄乃下知小
より加勢よりむむまきく高名あるゆへ
信雄乃雄乃字とゆるまふ又勢列乃子
陣乃とき信雄より九頭乃のしはハ
さ家三一一ら乃乃中かく致向と

雄長

助六郎

孫九郎

生國同前

織田信雄より細女乃ときよりなまことと

いづも親雄吉小秀吉はのしく物なる

小つ子雄長も秀吉へしつるる人き

高藤陣はとき九列名護屋少く文禄
二年七月十四日小病死時小四十二歳
法名善仲

乃より富田左近より命せらるるを以て
まを常吉へ申して雄長ハ秀吉につま
ま後秀頼小房より大坂小あや
高兼津乃時かご屋まで殺向と
国原沖津乃とき雄長領地は源小三
ある故知りし所へ移りしなり

東照大権現沖出馬より一とて夜ハ
帰らば津井左衛門尉森劫印中林大學
安彦若十郎生約因幡なご一味にて

先多福鶴左衛門左衛門宇森多家中表
そのと誰とあはせ雄長はさふとゆふ
小因幡つけ付是ととふ敵雄長を
ハ捨し因幡にはさあひ終り因幡小
うらと家雄長よとゆふゆいゆいお
まわが家より又宇森多が家長是立氏
誰より命令のさりさるる物と
雄長小のり小おさあはせ誰あはせ
そのとはささるる名あはせ坂草城

せうれとき町口乃門の内より白志ふい乃
さし物なく壁より小えゆるゆへ生駒因幡
こゝ人馬と素捨く門より乃塙につま
一藪素入とるく枝白志ふい乃若くも城
内へ引とるゆへより惣勢なりとせ門塙は
屋ぶき一層小素込もくく七曲へせめあ
るも片時より城と素とる町口は門一藪
乃先びけとるといへども馬と素捨てかち
じら六歳ゆへ城中へ八通集ると七曲より

詰現くゆへ時色與人ハあそむし因幡とい
者ハ今より尾列義直ハ小あつ園原合戦後
雄長ハ秀頼小居とる若浪乃知り亦右に
津乃刻かり田にありし事とまきうめりて

大指現より伊吉部少物直政うけるなり

糧米許領とく

薩摩守忠吉尾列へ入部乃とき
尾列乃案内なるゆへに御用此より
小く秀頼ハ作越さき田立人指こさ

新々として、雄長と其人、救乃内小く、
く忠者、主に、信ふ忠者、主卒去乃後
浪人、こなり、福徳、左衛門、右、又、亦、出入
と、主、後、方、く、流、浪、一、く、こ、進、ある、亦、小、山口
修理、色、と、雄、長、と、親、昵、乃、子、細、ある、亦、酒、升
雅、楽、頭、忠、世、と、修、理、色、を、た、ら、ん、で、言、上、
寛、永、十、年、六、月、二、十、八、日、小

將軍家へ石出さる

同十三年八月二十九日六十一歳わく死む

法名宗最

雄忠

助六郎 生國同お

寛永十一年酒升雅楽頭忠世に、
將軍家へ、出、進、雄、長、が、跡、職、を、承、
領、と

領と

家紋いゝえもん
七しち星ほし
檜ひのき扇あふぎ

富士

● 信忠

兵部

生國駿列

今川義元いけがわ ぎげん 小原こはら 一いち 富士郡ふじのこ 乃の ちと

領りやう

永祿えいりく 年中なちゆう 小北こきた 時とき 小五十七こいつしち 策さく

七郎右衛門

生國同お

寛永九年

將軍家を祿しほ——くまのり

信成のぶなり

布衣袴

生國同お

信直のぶちき

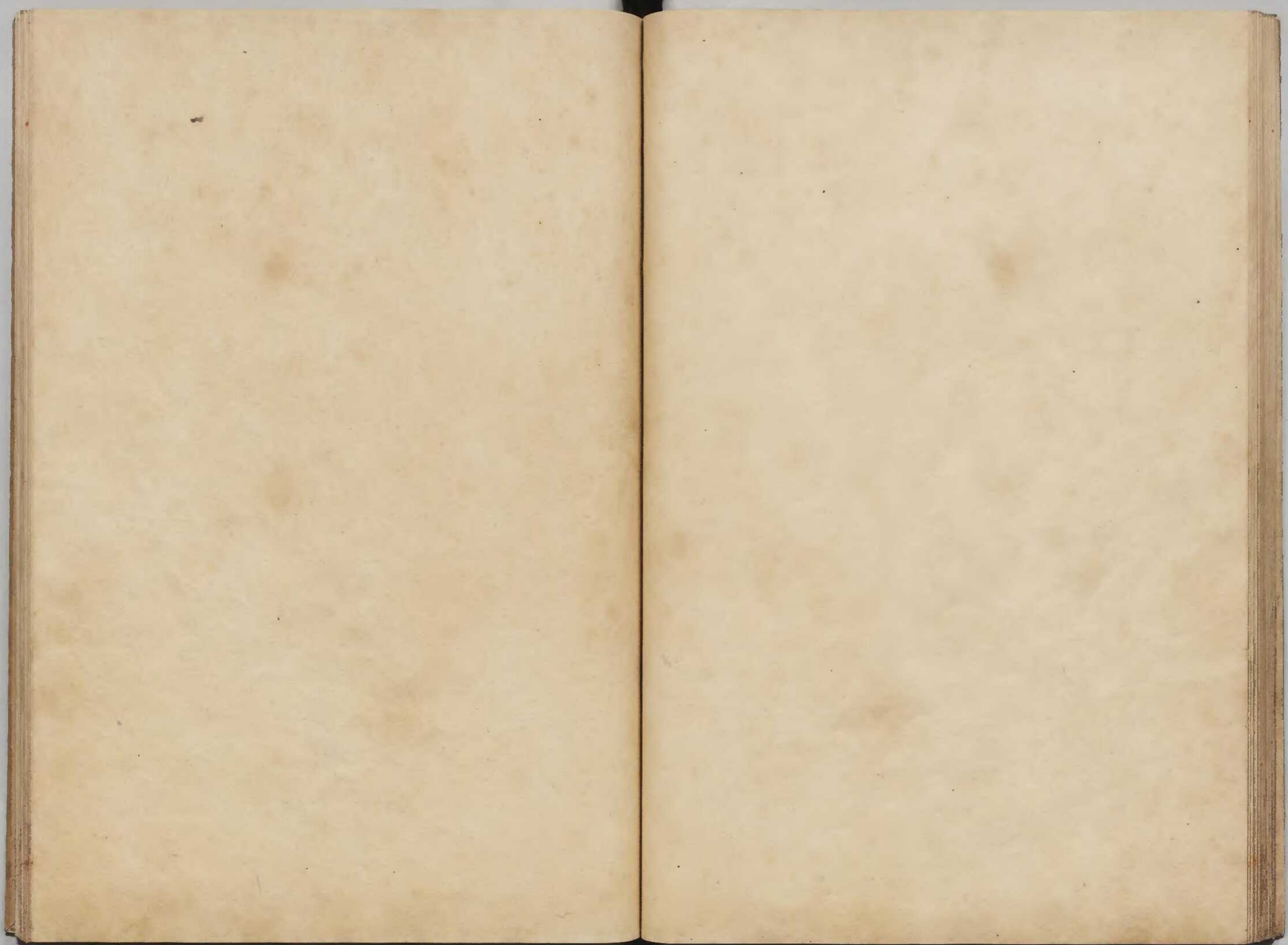
傳右衛門

生國同お

十九歳しゅうじゅうさつ

將軍家と祿しほ——くまのり

家紋いえもん櫻桐しんどう系けい 九の月くのつきあり



伏屋

為後

駿河守 法名清庵 生國養濃
織田信長 小治子

為長

右濤乃作

生國同前

秀吉小治之々々善請を以て相つて心関
原清陣以後

大権現（一）出た進出善請奉行と
らふ

慶長九年十月病死 法名春情

為次

新助 生國山城

慶長十四年為次十八歳より村越者

助頭次

大権現と縁

名徳院殿へは久々守松平越中守組より

清書院者と相つて心其後永升位派也

組小房といふと病ありて

と川とめず

為房

小長清尉

寛永十六年（1639）三月

將軍家ノ御（ご）一（ひと）なる時小十日（こじつ）家

家紋（いえもん）三刺串（さんさしぐし）園子（おんこ）

● 道友

長門守

生國後河

小長谷

今川氏真小治久氏真没落乃後武田
 信玄一いつく本願と知りて其後
 乃忠節あはれ信玄より加増乃
 地とすまふ院又教通こまはれ
 後

東照大権現とんげん後列ごりゅう所しよ入國にりく乃なりと云いひし

此こゝにしては久ひさしくと云ふ事なり

天正十九年てんしやうじゅうくわんねん病死びやうび六十二歳むそふにさい法名ほふな常宗じやうしゆ

時重ときしげ

弥右衛門やゑもん 生國なまくに同前どうぜん

大権現おほごんげん後列ごりゅう所しよ入國にりく乃なりと云いひし事は

小田原おだわら名護屋なごや乃なり所しよ陣ぢん小徳ことく半はん真田まんだ正まさ

陣ぢん乃なりと云いひ

名護院なごいん殿でん小吉こきち乃なりと云いひし事は

約やく命めい乃なりと云いひし事は

大坂おさか乃なりと云いひし事は

其後そのご

將軍家しやうぐんけ乃なりと云いひし事は

寛永くわんえい十年じゆんねん死去しよき歳さい七十六しちじゅうろく法名ほふな窓まど殿でん

時友ときとも

市無いちむ清せい

生國なまくに同前どうぜん

大権現おほごんげん強列つよりゅう沙入さいりゅう乃なりとと孫そん賜たまひと

小田原おくだわら名護屋なごや乃なり沙陣さじん小こ休やすと

真田まんだ沙陣さじん乃なりととと

名徳院なとくゐん殿どの乃なり沙さとと小列せうりゅう一いつ乃なりらら大だい毒どく

とと沙さとと心こころ

慶長十七年けicho 17ねん死去しうき五十二ごじふに年ねん法名ほふな体法たいぽう

時元ときもと

曰郎いっしやう古鷹門ふるたかかど

生國なまくに同どうお

慶長九年けicho 9ねん乃なり出でとと出でとと出でとと

大権現おほごんげんとと孫そんとと其その後のち

名徳院なとくゐん殿どの

將軍家しやうぐんけ八はち川がわ之の一いつとと一いつとと一いつとと一いつとと

政平せいへい

伊予いよ藩はん 生國なまくに同どうお

寛永三年かん'ei 3ねん

將軍家しやうぐんけとと孫そんと

正栄

上無事

生國同前

慶長元年

大権現と稱し

名徳院殿

將軍家小治久々大治者

案少く死云

正次

伊右衛門

生國同前

元和九年

名徳院殿と稱し

將軍家一治久々家督と弟正則小治

寛永十四年病死案三十

正則

傳十郎

生國同お

實ハ正業まことつ子小こ〜〜正次まさつぐがかりり正次まさつぐ

解と〜ななしし〜子こととす

寛永九年

將軍家しやうぐんとと并な〜〜〜正次まさつぐがかりり正次まさつぐ

をを〜りりととす

時次ときつぎ

加兵濤

生國同お

慶長九年

台たい院いん殿でんとと并な〜〜〜詢もと余のににおおりり

大おほ津つ妻つま乃の組ぐみ小こ入い

同十九年大板おほ津つ陣ぢん小こ供たてなな

寛永四年病死年四十二

法名ほふな常じやう清せい

時連ときづら

七郎兵濤

生國武藏

慶長九年

仁徳院殿と孫ひこ——とくまのり

同十二年大沙おご蕃乃組おご——い家

同十九年大坂おさか御陣ごじん乃とよ秋見あきみ比水ひみ

蕃ばん乃山やまと心こころ

寛永十一年二条にじょう御城ごじょう出番いっばん乃のららに病びょう死し

年四十四

時勝ときかつ

七之助

實じつハ大忌次郎おほいきじらう兵清直政へいせいちかが子こなり時連ときづら

と内縁ないえんあるゆへに家督かとくと川がわぐ

寛永十四年松平伊賀守えいがしゅ言上ごんじやうによりて

時連ときづらがきいと治ちをしり

同十六年大御おほご蕃ばん乃組のぐみ——い家

重次しげつぎ

九郎左衛門

生國なまくに同前どうぜん

慶長けicho十六年

名徳院殿と誅と——

元和元年 詢命もとふりて大津藁と川

と

時尚と

伊左衛門

寛永九年八月十九日

將軍家と誅と——

與滿と

与左衛門

寛永九年八月十九日

將軍家と誅と——

時之と

次郎右衛門

生國茂翁と

元和四年

名徳院殿と誅と——

寛永二年

將軍家より後之人は
大沙巻と

後と心

家紋上藤丸

● 政保

大^お選^{せん}三^{さん}郎^{らう}大^{だい}丈^{ぢょう}

生^{せい}國^{こく}三^{さん}河^が

廣^{ひろ}忠^{ちゆう}郷^{かう}乃^の清^{せい}時^{とき}

大^{だい}権^{けん}現^{げん}乃^の清^{せい}と^と年^{ねん}ま^まく^く後^ご久^くく^く乃^の清^{せい}乃^の清^{せい}

慶^{けい}長^{ちやう}十^{じゅう}九^く年^{ねん}七^{しち}月^{げつ}病^{びやう}死^し八^{はち}十^{じゅう}一^{いち}歳^{さい}

直政

二^に郎^{らう}兵^{へい}清^{せい}

生^{せい}國^{こく}同^{どう}前^{ぜん}

名^な清^{せい}院^{えん}殿^{でん}乃^の清^{せい}乃^の清^{せい}乃^の清^{せい}

大坂清陣おおいさかより供いけを

元和九年清上きよかみ洛乃ろのとき布衣ふいとゆる

きりきり

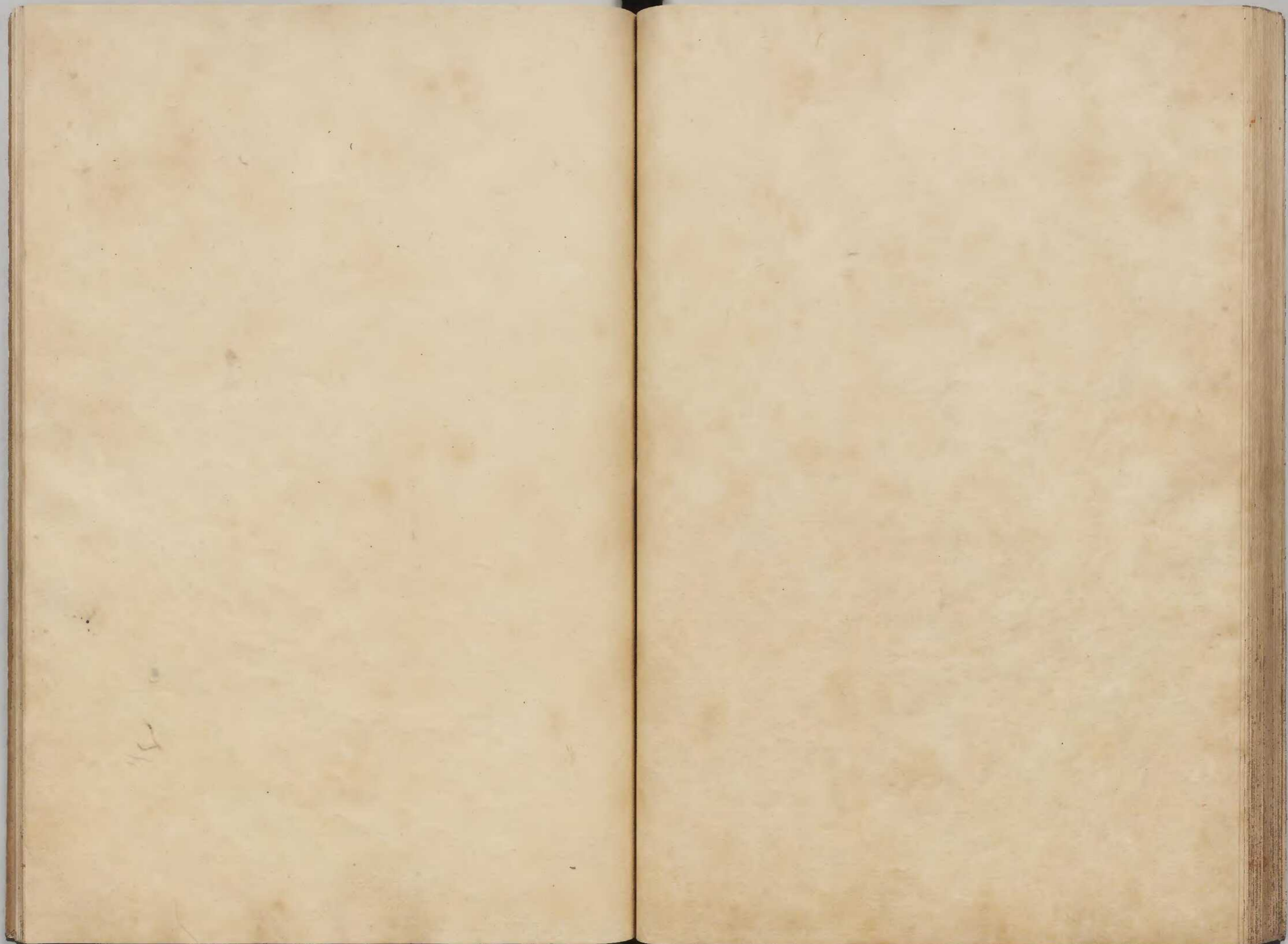
將軍家小つとくま川くまがわる清納戸頭きよのどとる

寛永九年七月晦日しげひ病死びやう五十一歳

大忍おほにん三郎大史おほしハ小長こなが七之助しちのすけ實父じつふ

きりきりおほにん乃の系けい馬まとくまの

家紋いえもん并な柳やなぎ箱はこ穂ほ穂ほ



表田うらた

● 某なにか

半兵衛はんべい

生國三列いこくさんれつ

大権現へ後久人なる

某

長兵衛尉ちやうべいゑい

生國同いこくどう

大権現

名徳院殿と拜と一と奉と

久ひさ者しや

傳つた右みぎ衛ゑ尉ゑう

生國なま武ぶ列り

名徳院殿と一と奉と

久ひさ重しむ

四よ郎らう次じ郎らう

生國なま同どう前ぜん

名徳院殿

將軍家と拜と一と奉と

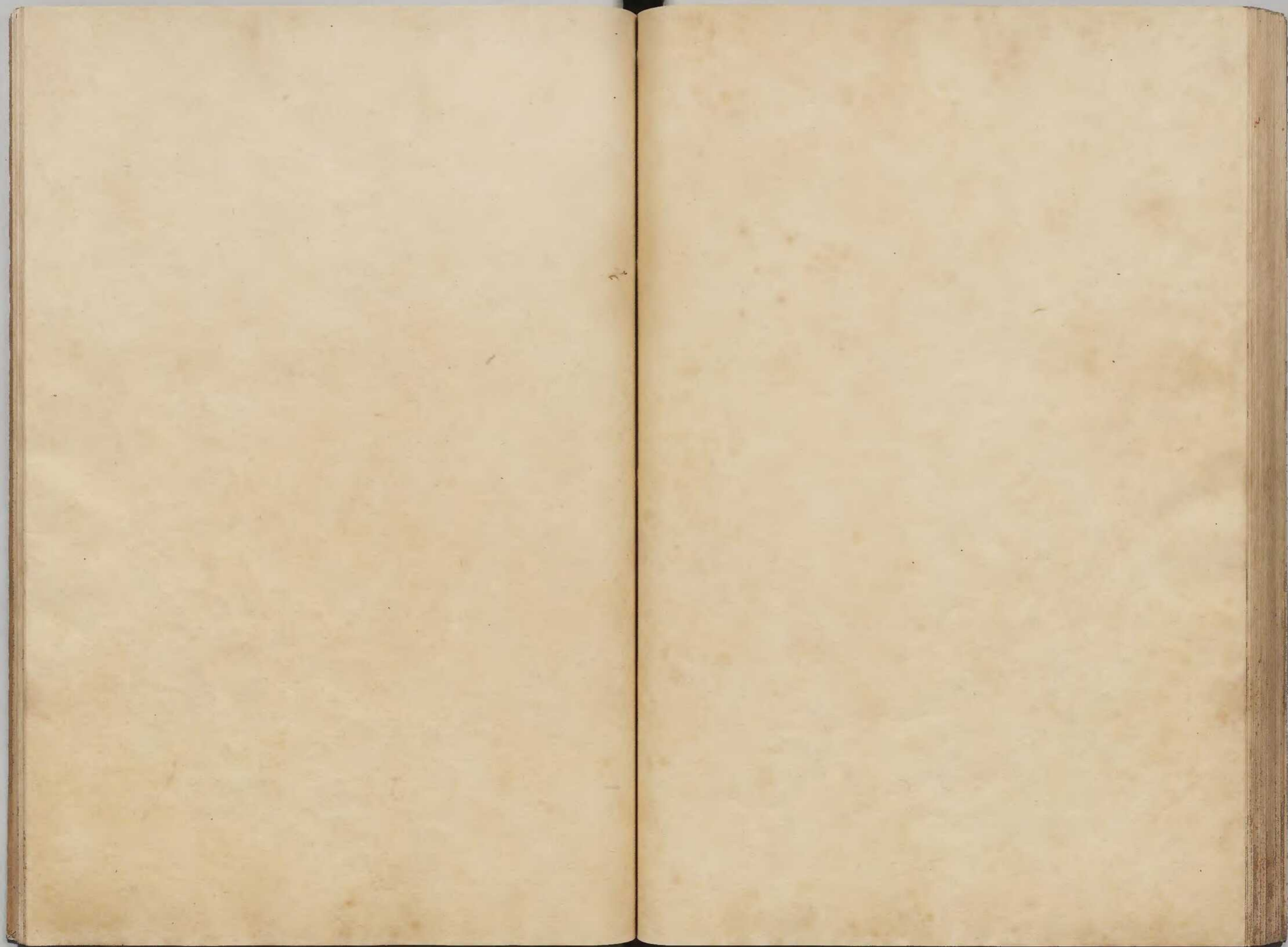
久ひさ次じ

七しち之の助すけ

生國なま同どう前ぜん

將軍家と拜と一と奉と

家いへ紋もん釘かぎ如ごと奉と



春田

某

半兵衛

将表

猪之助 渡小半 兵衛之 號と 生國 尾張
半兵衛 子と 乳る 實ハ 八田 掃部

将長まさながが子こなり将長まさながハ執と列りょう乃の任にん人にん家け紋もん
海うみ表は貝いなり将まさ者しや

東照大権現とうしやうだいこんげんよりより修しゆ之の人にんなり

慶長十年七月七十三歳けいぢやうじゆんしちがつしちさんさいなり

者次しやじ

猪之助いのちのすけ 生國いづくに後河ごが

大権現だいこんげん小修せう之の人にんなり

慶長十九年六月十七歳けいぢやうじゅうくわんしちがつしちじちさいなり

丞次しやうじ

猪之助いのちのすけ 生國いづくに後河ごが

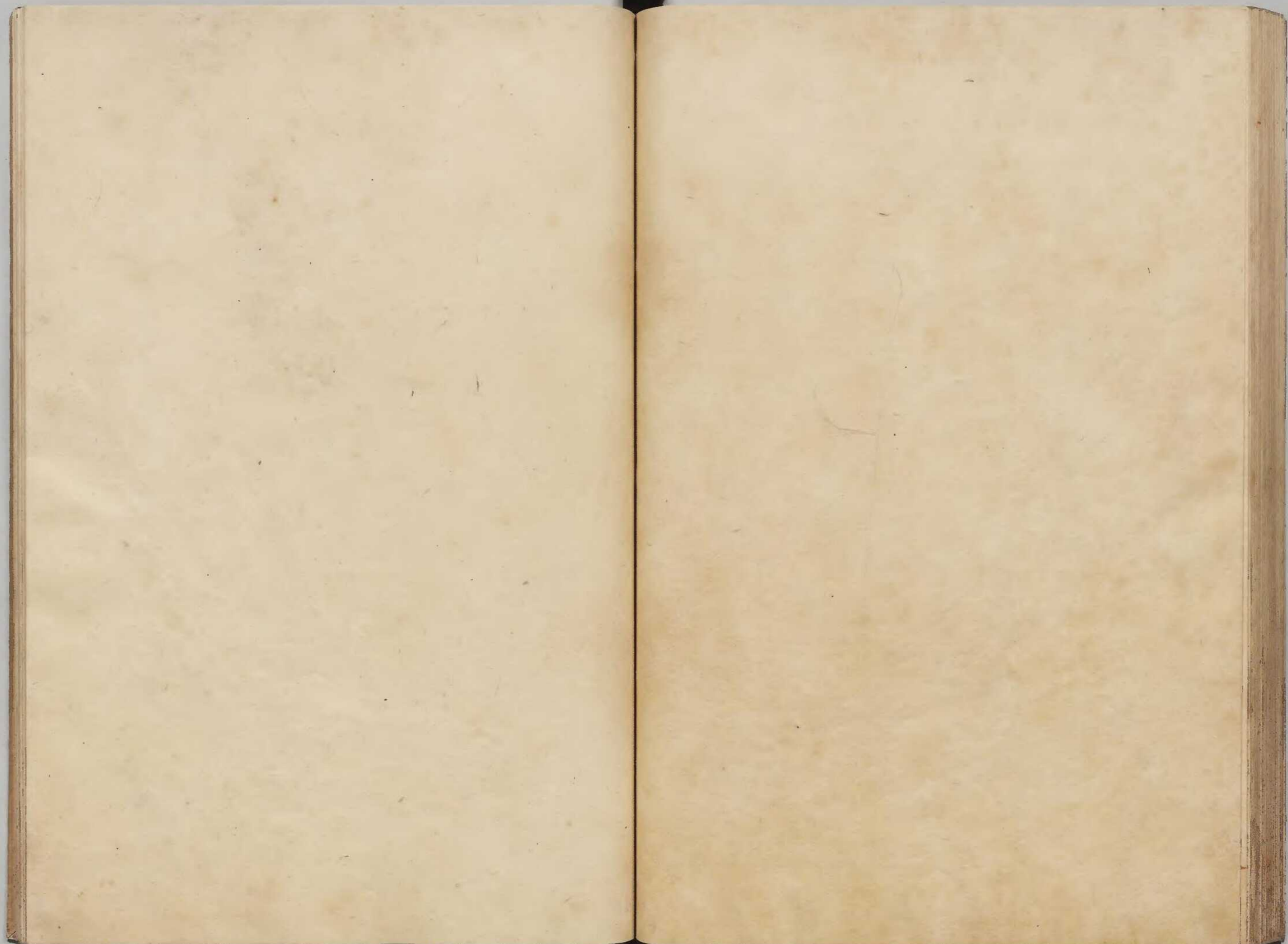
元和二年八歳げんわにじふにねんはちさいなり江戸えどよりより

名徳院なとくゐん殿のんと相あひま湯ゆと丞次しやうじ幼少ちゆうせうなり

水みづ表は乃のやくやくとと中なかつをを建たて元和九年げんわくわんねんなり

將軍家しやうぐんけ小修せう之の人にんなり

家紋けもん 丸まる乃の内うち矢や筈はず



矢頭ヤテ

● 重政シゲマサ

又一部

生國三列エノクミ

東照大権現トウショウ 小田原陣オダワラ

供奉クフ

元和七年四月二十六日六十九歳シノ

病死ビョウシ 法名通清ホウネ

重次

金戸湾門

慶長十二年終り出さず

大指現りしは之なり

慶長十九年元和元年大坂^{おおいさか}あり

御陣^{ごじん}りし供奉

元和三年

台徳院殿りしは之なり

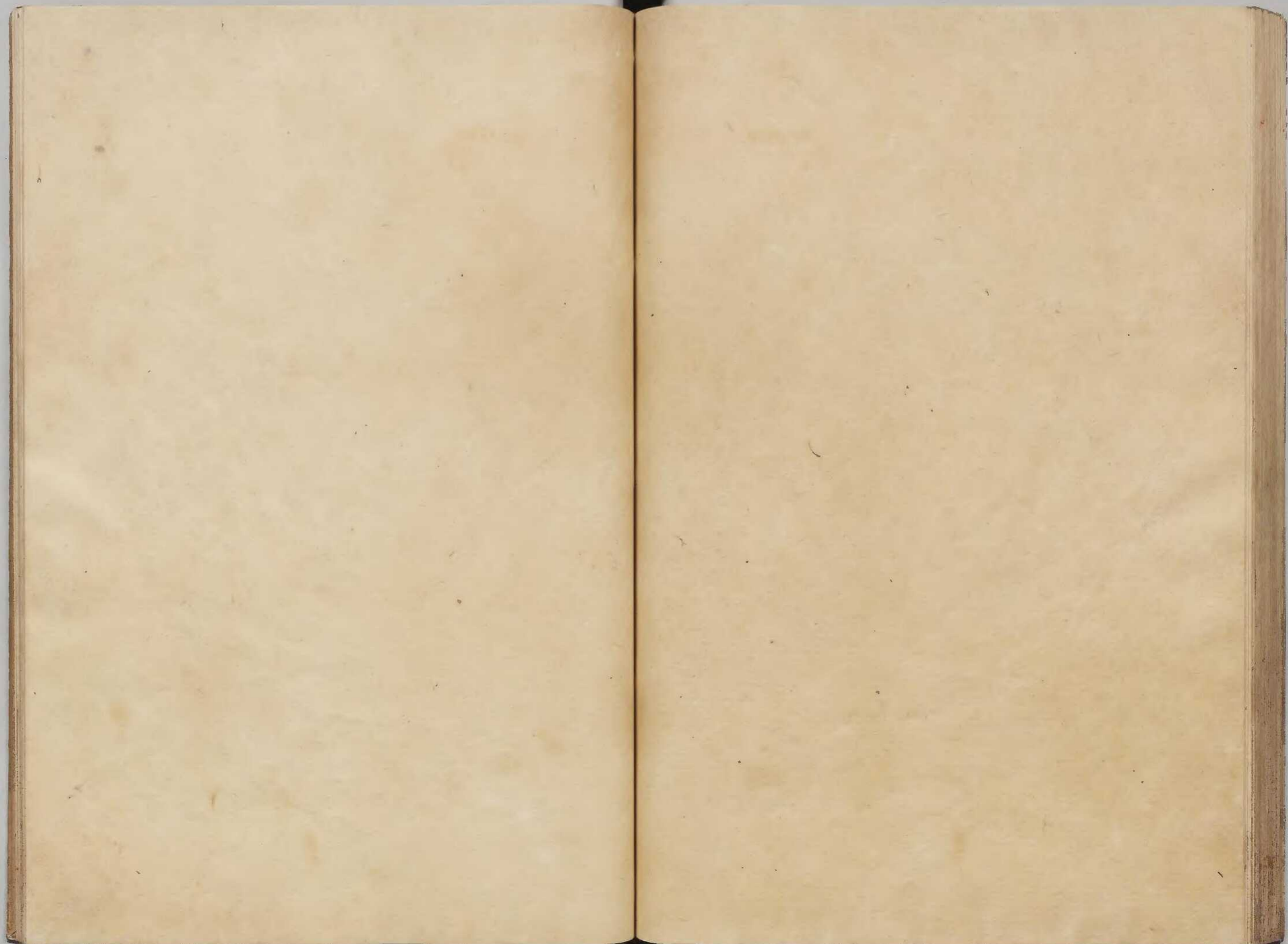
同十一年

將軍家小治之なりそ御^み廣敷^{ひろしき}^ご^ご^ごとす

同十九年武列^{ぶりく}忠乃領^{ちのりやう}内^{うち}りかわ

知行^{ちかひ}とす

家紋^{いかりもん}瑞^{みず}邊^へ



作脇さき

● 安連やすづな

三郎次郎

生國三河

廣忠ひろただのまらびり

東照大権現とうしょうだいこんげんのついでなる

安信やすのぶ

次郎大濠門 生國同家

永祿八年終り 出され

大権現小治之なるに沙合戦ありしなり

供養も其後本多作清守に属す

寛永六年四月二十二日病死年八十七

法名見宗

安雅

傳大濠門 生國同家

慶長五年

名徳院殿と稱しなる

同十九年大坂陣乃時供養

翌年大坂再乱乃時伏見の御養と

法名心

元和九年 作小僧

將軍家より終り法名進沙加増とて

武藏國忍乃内よおなぐ七百石を

領地と行り

寛永十三年
水書と流し

作し保く奥方乃

家紋露乃丸

芝山しやうざん

某なにか

齋十郎いせいじうぢやう

小岳こだけ

生國三河いけいこくさんか

大指現おほさしげん

名徳院殿なとくゐん（川之守がわのみもり）

慶長十年五月二十八日けichoじゅうねんごがつにじゅうはちにち武列ぶれつよおわく

病死びやうし年八十八ねんはちじゅうはち法名ほふな向善じやうぜん

正次まさつぎ

孫也まさつぎ

生國同矣きこくどう

大権現

名法院殿へ川之なる

慶長十八年武列ぶりゅう小おろくおろく五十五いそよまで

死しと法名ほふな淨心じゆしん

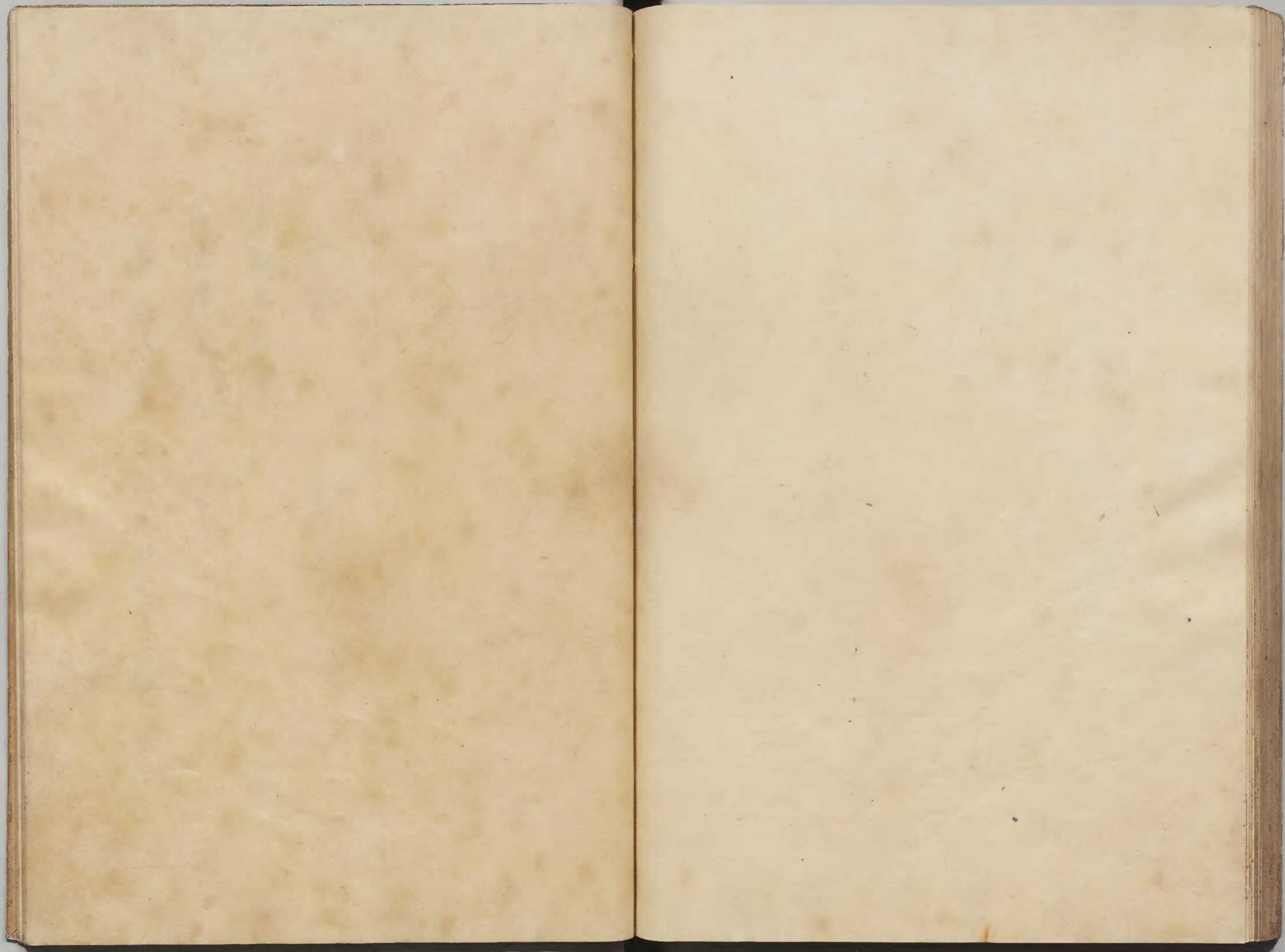
正知まさち

指右邊門尉 十七歳乃時しちしちさいのとき

名法院殿

將軍家と孫みまなる

家紋いゝしん扇あふぎ



尾崎おしき

某たがひ

中務なかづ

生國なまくに之河

東照大権現

台榭院殿たいせいでんへ

慶長八年三月廿七日七十二歳まゝに病まわ死し

成吉

勅兵衛

生國同お

大権現へ流るる

慶長八年十月九日伏見乃城在麦

乃ら病死

正友

勅兵衛

信重

助大吏

生國三列

大権現

台徳院殿

將軍家へ流るる
寛永九年八月十五日六十歳よりて病死

信正

七之助

久重

武助

生國同前

久重子ふき少人正勝と出でて家督と
少川守

名法院殿

將軍家へ後久少く少川守

寛永元年三十五歳に死む

正勝

武助

生國武列

実ハ筒井七郎左衛門重三の子

將軍家へ後久少く少川守

寛永十四年 作少川守とて出でて家督とす

家紋 菱乃左巴

● 忠元

筒井甚六

生國三列

清康君 きよかみ 廣忠郷へ流るる
天正元年六十八歳まゝにて歿す

久忠 ひさただ

筒井弥左衛門 生國同前 きくにん

大権現

名流院殿

將軍家へ川之なる

重三 しげさん

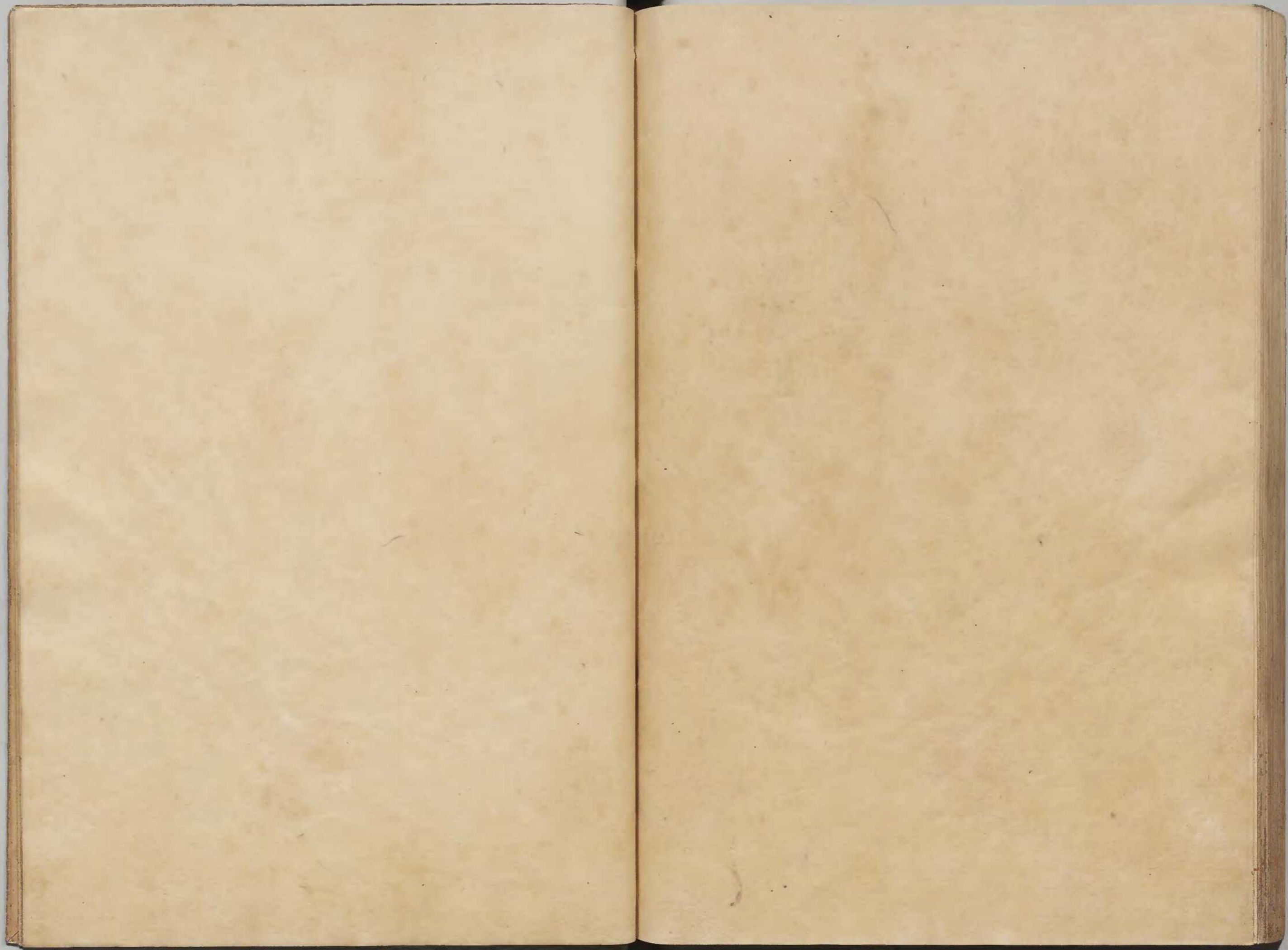
筒井七郎左衛門 生國武列 きくにん

名流院殿

將軍家へ川之なる

正勝

武助



尾闈 おし

● 勝平 かちへい

孫次郎

生國尾列 いこくおしり

信長小つゝふ八十三歳はちじゅうさんさい病死ひやうし法名ほふな淨辰じやうぢん

貞平 まことへい

甚太郎

生國同外

大権現

台法院殿（川）之守

六十回歳より亡病死

法名津雲

正平

右大史

生國江別

將軍家（川）之守

家紋九星

